

次の100年に向かって

理事長・院長

G.W.パークレー

この3月に、西南学院創立100周年事業の集大成ともいえる『西南学院百年史』（以下『百年史』という）を刊行した。100周年の最後を飾る事業にふさわしく、「通史編」および「資料編」の全2巻から成る堂々たる正史である。『百年史』は、学院の100周年を機に、現在までの歴史を詳細に記録し、次の100年の道標として後世に伝えることを目的として編纂されたものであるが、『西南学院七十年史』（以下『七十年史』という）以降の30年間の歴史を単に加えるのではなく、新たな視点で編纂作業に取り組んだことが、この『百年史』の特筆すべき点といえる。その背景には、具体的な編纂作業を開始するにあたって百年史編纂委員会において確認された「基本方針」の存在がある。基本方針では6つの事柄が掲げられているが、その一つである「西南学院創立の理念である建学の精神に基づく伝統を共感・継承するために、キリスト教主義学校としての西南学院の歴史を記録する。その際に、学校史研究の成果を踏まえた新たな知見に基づき、日本近現代史、教育史、教育行政史との関連を重視する」との方針に基づき、学院の歴史を新たな視点で見直すことができたことは、今回の『百年史』刊行の意義であると同時に、大きな成果であったといえる。

『百年史』は、2005年に設置された百年史編纂諮問委員会を皮切りに、同準備委員会を経て、2010年4月に同編纂委員会を設置して本格的な編纂作業を開始した。編纂にあたっては、保育所、幼稚園、小学校、中学校・高等学校、大学の各部門の教職員に執筆を依頼し、最終的には延べ84人（総論26人、各論58人）もの方々のご協力を得ることができた。また、編纂作業にあたっては、教職員のほか、これまで西南学院に関わってこられた方々にも多数ご協力いただき、数多くの編纂委員会や監修委員会、各部会を通じて、地道で根気を要する作業を重ねてきた。原稿の執筆については、例

えばプロのライターに依頼することも考えられたが、『七十年史』編纂時の反省を踏まえ、学院全体で編纂作業に携わるという姿勢を大事にした。そのようなオール西南の体制により編纂されたことも、今回の『百年史』の大きな意義であったといえる。なによりも、2005年から14年間におよび膨大な編纂作業を成し遂げられたのは、「西南よ、キリストに忠実なれ」という学院の建学の精神のもと、学院の100年の歴史を後世に伝え、引き継いでいってほしいという関係者全員の強い思いがあったからこそであろう。これら多くの方々のご尽力により『百年史』が完成を迎えることができたことに対して、改めて厚く御礼を申しあげる次第である。

これまでにない大がかりな事業ゆえに、『百年史』の編纂にあたっては、各部会や執筆者、編纂体制などにおいてさまざまな問題や課題があった。本紀要に収録されている「百年史編纂を振り返っての座談会」は、今回の編纂に係る問題点を明らかにすることが次の年史編纂時に必ずや役に立つと考え、そのことを記録に残したいという編纂委員会や監修委員会の発想から生まれたものである。座談会では、10年ごとに百年史を補完する紀要や資料集を作成し、それをベースに150年史などを発行したらどうかという案や、編纂体制と各部会の役割、オーラルヒストリーの功罪など、話は多岐に及んだ。このように、『百年史』が刊行されればそれで終わりとするのではなく、その成果や課題を記録に留め、次に繋げていくという意味において、本紀要の果たすべき役割は非常に大きいものがあると考え。本紀要が、一つひとつの問題をゼロから始めるのではなく、経験値として有効活用されて、次の年史編纂に生かされることを切に願っている。